

# 令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

令和3年8月31日 秋田県病害虫防除所

<b>【内容】</b> Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	<b>【問合せ先】</b> 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
<b>【お知らせ】</b> ◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表は令和3年9月28日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 <a href="https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/">https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</a> ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。 <a href="https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/">https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</a> ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 <a href="http://www.famic.go.jp/">http://www.famic.go.jp/</a> ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 <a href="http://www.e-komachi.jp/">http://www.e-komachi.jp/</a>	

## I. 予報の要点

大豆	マメシクイガの発生量はやや多いと予想されます。連作により密度が高まり被害が増大しますので、特に、連作ほ場では、9月上旬の防除（1～2回）を徹底してください。
野菜	病害では、トマトの灰色かび病が多い、葉かび病がやや多いと予想されます。病害は、予防散布に努め、発病を確認した場合、治療効果のある薬剤を散布してください。 虫害では、ねぎ（秋冬どり）のシロイチモジヨトウがやや多いと予想されます。散布時期が遅れると効果が低下しますので、発生初期からの薬剤散布に努めてください。また、トマトのヒラズハナアザミウマがやや多いと予想されます。薬剤が花房に付着するよう、丁寧に散布してください。
果樹	ナミハダニの発生がりんごでやや多い、なしで多いと予想されます。発生が多い園地では、越冬態がみられる前に防除してください。また、果樹カメムシ類の発生がなしで多いと予想されます。飛来が多い場合には、ネオニコチド剤又は合成ピレスロイド剤を散布してください。 各樹種とも収穫期を迎えますので、薬剤防除を行う際は、収穫前日数に十分注意してください。

## II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
大豆	フタスジヒメハムシ	全県	—	平年並	平年並
	マメシクイガ	全県	—	やや多い	やや多い
ねぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	少ない
	シロイチモジヨトウ	全県	—	—	やや多い
きゅうり	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
キャベツ (秋冬どり)	コナガ	全県	—	平年並	やや少ない
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	平年並
	ヨトウガ(第2世代)	全県	—	平年並	やや少ない
	ハスモンヨトウ	全県	—	平年並	平年並
トマト	灰色かび病	全県	—	多い	多い
	葉かび病	全県	—	やや多い	やや多い
	ヒラズハナアザミウマ	全県	—	やや少ない	やや多い
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	平年並	平年並
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	多い	やや多い
	輪紋病	全県	平年並	平年並	やや少ない
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類 (モモシクイガ)	県北部	—	平年並	平年並
		県中央部・県南部	—	やや少ない	やや少ない
	ナミハダニ	全県	—	多い	やや多い
	リンゴハダニ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	平年並
なし (日本なし)	黒星病(秋型病斑)	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	平年並	平年並	やや少ない
	シンクイムシ類 (モモシクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	多い	多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	多い	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並

### Ⅲ. 発生予報と防除対策

#### A 大豆

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. フタスジヒメハムシ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、8月5半旬の巡回調査における株当たり成虫数は0.0頭（平年0.1頭）で平年並だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発ほ場ではアグロスリン乳剤などで防除する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. マメシクイガ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、8月5半旬の巡回調査における成虫の叩き出し数は0.7頭（平年1.1頭）で平年並、発生地点率は37.5%（平年25.4%）でやや高かった（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により密度が高まり被害が増大するので、連作ほ場では防除を徹底する。

イ、薬剤は次のいずれかで散布する。

- ① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は9月上旬までに1回散布する。
- ② エルサン乳剤、グレーシア乳剤、スミチオン乳剤、トレボン剤（粉剤DL、乳剤、EW）、プレバソフロアブル5は、9月上旬に1～2回散布する。なお、前年多発したほ場では2回散布とする。
- ③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル5を9月上旬に2回散布する。
- ④ エルサン乳剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5の総使用回数に注意する。

ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

#### B ねぎ（秋冬どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. さび病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（/±）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は0.3%（平年4.1%）でやや低かった（/-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、夏どりねぎの被害残さは、ほ場外で処分する。

イ、多発すると防除効果が低下するので、発病前の防除に努める。発病を確認した場合は、直ちに

アミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル、カナメフロアブルなどを散布する。アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は1.8%（平年6.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、肥料切れや生育後期に草勢が弱くなることで発生が助長される。

イ、害虫の食害痕や、べと病及びさび病などの病斑上に感染するが多い。

ウ、本県における秋季の発生は、葉枯病が主である。葉枯病が原因の黄色斑紋病斑は、収穫物の品質低下につながるので、アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤を組み合わせ、9月前半～10月前半に約10日間隔で散布する。アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類（ネギアザミウマ）	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月4半旬の巡回調査における食害株率は25.8%（平年38.8%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生源となるほ場周辺及びほ場内の雑草除去に努める。

イ、多発すると防除効果が低下するので、発生初期からアドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、グレース乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブルなどを茎葉散布するか、ダントツ粒剤などを株元散布する。

ウ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ネギハモグリバエ	—	少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月4半旬の巡回調査における食害株率は0.4%（平年23.9%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が低下するので、発生初期から、アグロスリン乳剤、グレース乳剤、ダイアジノン乳剤40、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、リーフガード顆粒水和剤などを茎葉散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統(B系統)の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シロイチモジヨトウ	—	やや多い(—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における発生株率は0.8%(前年0%)で前年より高かった( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、散布時期が遅れると効果が低下するので、発生初期からアグロスリン乳剤、アディオン乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤などを茎葉散布する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

## C きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は0%(平年2.5%)でやや低かった( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、冷涼多湿条件で発病が多くなるので、山間高冷地では予防散布に努める。

イ、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000などを散布する。発病を確認した場合は、整枝・摘葉を適切に行い、直ちにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤などを散布する。

ウ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場で処分し、支柱などの各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 炭疽病	—	平年並(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は15.0%(平年13.1%)で平年並だった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに取り除き、ほ場で処分する。

イ、発病前からジマンダイセン水和剤、ベフドー水和剤などで予防に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

エ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

オ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を4～5日にする。

カ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場で処分し、支柱などの各種農業資材

はケミクロンG等で消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は19.7%（平年21.2%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000などによる予防散布に努める。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、チオファネートメチル剤、ジエトフェンカルブ剤、ボスカリド剤、アゾキシストロビン剤では耐性菌が確認されているので、異なる系統の薬剤を選択する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が著しい場合は、薬剤の散布間隔を4～5日にする。

オ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱などの各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

## D キャベツ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、秋田市予察ほにおける8月2～5半旬におけるフェロモントラップの誘殺数は2頭（平年6.8頭）でやや少なかった（ /—）。

ウ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭（平年0.1頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低い場合は、遅効性で残効の長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。

イ、発生が多い場合は、ネライストキシン系剤、アフーム乳剤、グレーシア乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5などを散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。

ウ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.0頭 (平年0.0頭) で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ (第2世代)	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0.0頭) で平年並だった ( /±)。

ウ、秋田市予察ほにおける8月2～5半旬のフェロモントラップ総誘殺数は0頭 (平年0.6頭) でやや少なかった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ハスモンヨトウ	—	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0頭) で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
黒腐病	—	平年並	平年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (モアアカアブラムシ)	—	やや少ない	やや少ない	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。

## E トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	—	多い（前年並）

### (1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、8月中～下旬の巡回調査における発病株率は28.6%（平年3.4%）で高かった（ /+）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早期に除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤、ベルコート水溶剤、ロブラール水和剤などで予防散布に努める。  
発病を確認した場合は、ゲッター水和剤、スミブレンド水和剤などの治療効果のある薬剤を散布する。
- エ、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌が確認されているので、薬剤の選択には留意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 葉かび病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

### (1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、8月中～下旬の巡回調査における発病株率は38.8%（平年31.3%）でやや高かった（ /+）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ、肥料切れを避ける。
- ウ、発病前からゲッター水和剤、ダコニール1000、ベルコート水和剤などで予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン水和剤などの治療効果のある薬剤を葉裏にもかかるように散布する。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヒラズハナアザミウマ	—	やや多い（－）

### (1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温及び降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、北秋田市予察ほにおける8月4～5半旬の青色粘着板への誘殺数は678頭（平年179頭）で多かった（ /+）。
- ウ、8月中～下旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.01%）でやや少なかった（ /－）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア、スピノエース顆粒水和剤、ベストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤などを花房に付着するよう丁寧に散布する。ただし、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。



病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中～下旬の巡回調査における発生株率は0% (平年0.1%) で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス内外の除草に努める。

イ、摘葉後は、残さを早期に処分する。

ウ、多発すると防除効果が低下するので、発生初期からアディオン乳剤、アドマイヤー水和剤、ノーマルト乳剤、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。

## F りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病葉率は1.8% (平年2.8%)、発病地点率は77.3% (平年86.4%) でいずれもやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、9月中旬以降も高温・多雨の多発条件が予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

ウ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢率は1.3% (平年3.7%)、発病地点率は13.6% (平年20.9%) でいずれもやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ、発生園では、Q o I 剤の使用を避け、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。

エ、未発生園では、Q o I 剤の使用が可能であるものの、必ず作用機構の異なる保護殺菌剤 (ベルクト水和剤、有機銅剤など) を加用する。また、耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0.03%（平年0.01%）、発病地点率は9.1%（平年1.4%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、日焼け果は発病しやすいので、摘果する。

イ、被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋める。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

エ、9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

オ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 輪紋病	平年並（—）	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、主な感染期間である6～7月の降水量が少なかったことから、感染量は少なかったと推定される（ /-）。

ウ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.4%（平年0%）、発病地点率は22.7%（平年0%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、現在、葉での発病が確認され、かつ9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

ウ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	県北部 平年並 (前年より少ない) 県中央部・県南部 やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、県北部の防除適期決定ほ (2地点) における8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップへの総誘殺数は130頭 (平年121頭)、8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年1.3%) でいずれも平年並だった ( /±)。

ウ、県南部の8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0.1%) でやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は速やかに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件 (20～22時の気温が18℃以上) を満たす日が続く場合は、ネオニコチノイド剤などで防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は4.7頭 (平年0.8頭) で多く、発生地点率は63.6% (平年42.9%) でやや高かった ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では、越冬態が見られる前に薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用、かつ作用点が同一の剤は年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は0頭 (平年0.01頭)、発生地点率は4.5% (平年7.5%) でいずれもやや低かった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用、かつ作用点が同一の剤は年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、防除適期決定ほ(7地点)における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は29頭(平年80頭)で平年並だった ( /±)。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0.05%(平年0.08%)でやや低く、被害地点率は13.6%(平年14.6%)で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況を良く観察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

## G なし (日本なし)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病 (秋型病斑)	—	やや少ない (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.02%(平年0.15%)で低く、発病果率は0.17%(平年1.10%)でやや低かった ( /—)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は直ちに切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は8.4%(平年15.9%)、発病果率は0%(平年0.3%)でいずれもやや低かった ( /—)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝及び発病が見られる枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 輪紋病	平年並 (-)	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、主な感染期間である6～7月の降水量が少なかったことから、感染量は少なかったと推定される( /- )。

ウ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0% (平年0%) で平年並だった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	-	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける、8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップへの総誘殺数は554頭(平年302頭) で多かった( /+)。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0.01%) で平年並だった( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件(20～22時の気温が18℃以上)を満たす日が続く場合は、ネオニコチノイド剤などで防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	-	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている( /±)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0.23頭(平年0.07頭) で多く、発生地点率は45.5% (平年27.3%) で高かった( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、越冬態が見られる前に薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用、かつ作用点在同一の剤は年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. リンゴハダニ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0頭（平年0.00頭）でやや少なく、発生地点率は0%（平年4.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤年1回の使用、かつ作用点が同一の剤は年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける、8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへのカメムシ類の総誘殺数は57頭（平年17頭）で多かった（ /+）。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0.30%（平年0.02%）、発生地点率は30.0%（平年6.0%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部や林地に隣接する園地では、特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

## H ぶどう

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病葉率は0%（平年0.5%）、発病果房率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、欧州系品種の他、巨峰などの大粒種、スチューベンで発生が多くなりやすい。

イ、発生が多い園地では、銅剤を散布する。ただし、ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びビコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を加用する。

ウ、翌年の伝染源となる落葉は、土中に埋めるなど適切に処分する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 晩腐病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

イ、翌年の伝染源となる巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は切除後、土中に埋めるなど適切に処分する。

## IV. 気象予報

令和3年8月26日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（8月28日～9月27日）

### (1) 予報のポイント

- ・ 東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。
- ・ 向こう1か月の気温は、ほぼ平年並の見込みです。

### (2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	40%	30%	30%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

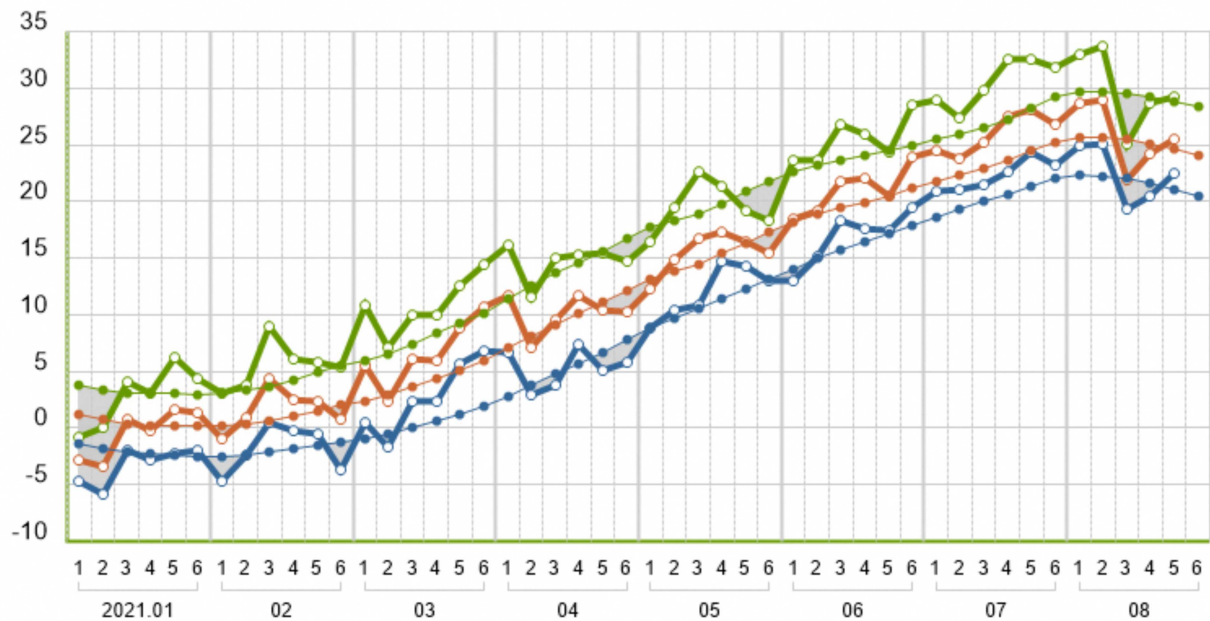
### (3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
8/28～9/3（1週目）	20%	50%	30%
9/4～9/10（2週目）	30%	50%	20%
9/11～9/24（3～4週目）	40%	30%	30%

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬 秋田県農業気象システムより)

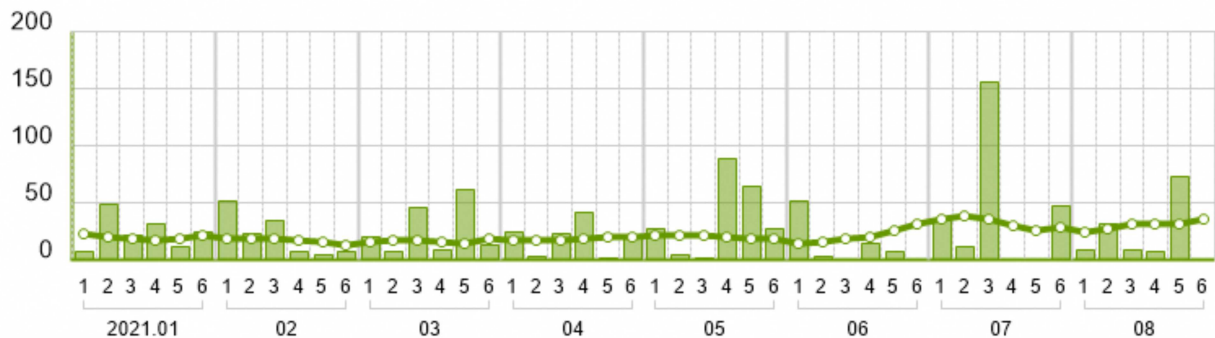
気温℃

平均気温 最高気温 最低気温  
 平均気温平年値 最高気温平年値 最低気温平年値



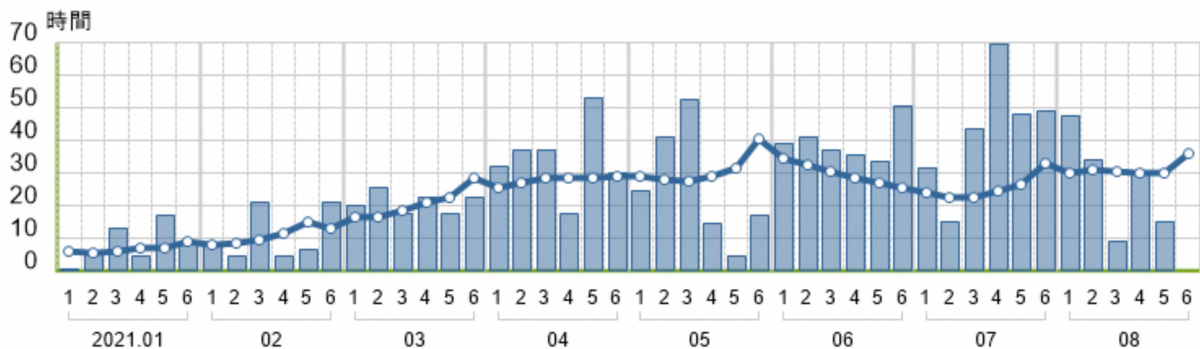
降水量ミリ

実況値 平年値



日照時間

実況値 平年値





## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

### 気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

## 農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
  - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
  - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
  - ・ 防除履歴を必ず記録する。
  
- 農薬使用上の注意
  - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
  - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に十分周知する。
  - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
  - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
  - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。
  
- 農薬の取扱い上の注意
  - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
  - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。